

# 学生図書委員会 活動報告ほか

## 古典文学を読んでみて

4C 中谷 美智

皆さんは「日本の古典文学」と聞いて、最初に何を頭に思い浮かびますか？

私はまず始めに紫式部の「源氏物語」が思い浮かびました。他にも清少納言の「枕草子」や「竹取物語」、「平家物語」、「方丈記」、「徒然草」…etc. があり、「日本の古典文学」と聞いたらだいたいは平安時代～鎌倉時代の文学を思い浮かぶと思います。今回はその時代の中で生まれた作品を紹介させていただきます。

今回紹介する本は、ちくま文庫の「とりかえばや物語」（中村 真一郎訳）です。この本は平安時代末期に成立したと推定されている作者不詳の古典文学「とりかえばや物語」を現代語訳にアレンジして出版されています。因みに「とりかえばや」とは「取り替えたいなあ」という意味の古語であり、ページ数は250ページぐらいなのであまり長い話ではありません。

物語はある権大納言（平安の貴族）の二人の妻に美しく顔立ちがそっくりな男子と女子が産まれたところから始まります。ただ、この二人はなぜか成長していくにつれて姫君が男性的な性格になり、反対に若君は女性的な性格になってしまいました。父親はそのことに非常に悩ませていましたが、ついに父親は姫君と若君を取り替えて育てることを決意して、二人は性別とは反対の成人の儀式をします。その後、男装の女子である「若君」は宮廷（男性ばかり）へ女装の男子「姫君」は後宮（女性ばかり）へ出仕し始めるようになり、二人とも次第に自らの天性に苦悩し始めることとなります。

この物語は男女の入れ替えというかなり非現実的な話をしてしていますが、平安時代の人間関係や心情の描写は現実的で物語がしっかりしていると思えました。話の中には「源氏物語」と近い色恋沙汰の展開があって恋愛色が少しきつめですが、話の中で出てくる主人公達の悩みは現代で通ずるところがあり、古典文学にしてはけっこう読みやすい内容でした。

古典文学は昔の単語の意味が分からないことが多かったので今まで読むことはありませんでした。でも、現代語訳されているこの本は小説と変わりなく、内容も堅苦しくもなかったので普通に読み進めることができました。

この本はもちろん図書館に置いています。他にも図書館には色々な現代語訳された古典文学が置いていますので、一度古典文学に触れてみてはいかがでしょうか。

## ブックハンティングについて

2I 嶋田 友樹

みなさん、こんにちは。今回は、ブックハンティングについてみなさんにお話にしようと思います。

ブックハンティングとは、年に2回——梅雨の時期と冬の始まりの時期行われる、図書委員会のビッグイベントの1つです。

まず、ブックハンティングが開始される前に図書委員を通じて、全学生から奈良工業高等専門学校（以下、奈良高専）の図書館で貸し出しを行ってほしい図書——通称、希望図書の募集を行います。募集期間を過ぎると、図書委員の担当の教諭が一旦、希望図書の書かれた用紙を全て回収し、図書委員会全員で、希望があった図書が予算内に収まっているか、図書館で貸し出しを行うに相応しい本であるかを査定します。そうして、購入が決まった図書を、大阪府の梅田にある「ジュンク堂書店」で一斉に購入を始めます。以上が、ブックハンティングの大まかな流れです。

ブックハンティングの醍醐味はと言えば、何と言っても、ジュンク堂書店へ本を買いに行くことでしょう。本の購入は、主に土曜日に行われます。ブックハンティングにいらっしやっただけのみなさんは恐らく、ジュンク堂書店で見る多量の本に圧倒されたことでしょう。私も、ジュンク堂書店で見る多量の本に圧倒されました。本が好きな人にとっては、たまらない空間となるはずです。

各クラスから希望のあった分の図書を購入すれば、その時点でブックハンティングは終了です。後は帰るだけ

になるのですが……。 「帰りは団体で」ということは無いので、各クラスの希望図書を購入し終われば、自由解散となり、好きに本を見て回ることができます。先程も申しあげたように、ジュンク堂書店はかなり大きな書店なので、探している本等があれば、きっと見つかることでしょう。

以上のように、ブックハンティングは非常に楽しいイベントとなっております。予算に余裕があれば、図書委員会以外の方もブックハンティングに参加できますので、本が好きな方は是非ブックハンティングに参加してみてください。

## 「ファイマン物理学」

5E 山田 諒明

「ファイマン物理学」というと皆が一度は耳にしたことがあるだろう。有名なだけあり、もちろん奈良高専図書館にも洋書版、邦訳版ともに蔵書されている。が、あまり借りられてはいないようである。

外観はA4ハードカバーで厚み2cmほど、それが洋書版は3冊、邦訳版は5冊で構成される。カバンに入れて運ぶには1冊でも少々重いだらう。内容はファイマン博士がカリフォルニア工科大学で学部1,2回生に対し、2年間にかけて行った物理学の講義の内容をまとめたものであり、例題、演習問題ではなく文章での説明が中心となっている。問題の解き方の教科書ではなく、理解そのものを高める教科書といえるだろうか。

実際読んでみると、まずはじめは内容が難しい、これに尽きるだろう。内容は高度で、微積分は当然のように使えないと話にならないし、議論そのものが自分の得意な分野のものでさえも間違えなく難しいと感じることだろう。この内容の講義が大学1,2回生に対して行われていたのかと思うと、よくもまあこんな高度なことをやったものだなと圧倒される。(もっとも1,2回生のほとんどは脱落し、3,4回生や院生が満員で聴講していたようだ)

しかし、理不尽な難しさというわけではない。わかりにくい専門書にありがちな、理論説明が途中で急にジャンプしたかのような説明不足に陥っているところはほとんどなく、高度で難しいだけで道理に従った流れで説明が行われている。また、数式での議論だけで「数式上でこうなるんだから物理現象もこうだ」といった誤魔化しめいた説明ではなく、それが実際どういう現象なのかというイメージそのものをつかむための説明が行われている。つまるところ、難しい教科書であるが、それに見合った理解度の上昇を望める教科書なのである。また、すでに理解しているつもりの内容でも、より非常に高度な議論に触れることで広い視野が得られることだろう。

物理学およびに数学が得意で、高専の授業内容が簡単に思っている人にはぜひとも1回、自分の得意分野の1冊でいいのでこの本を読んで貰えればと思う。簡単に読み進めることはできないが、自分の知っている先にはこんな世界が広がっているだということを知ることができるだろうし、また物理への深い理解を得られるだろう。

## 本の取り扱いについて日頃思っていること

4M 谷口 皓平

図書館だよりの原稿を書いてくれと言われて、二つ返事で引き受けたものの何を書いたらいいのかサッパリわかりませんでした(笑) どうせ学生はあまり見ないだろう、という希望的観測から図書館の本の取り扱いについて日頃思っていることを書いてみようかなと……

奈良高専の図書館には大きく分けて専門書と一般図書(文庫本など)の二つがあります。一般図書はネットや町中の本屋さんで比較的簡単に購入することができますが、図書館にある専門書は値段が高かったり、絶版になっていたり個人が簡単に購入することができない本が多いです。(私がいる機械科の場合)低学年のころはレポートの数も少なく、内容も比較的簡単であるためあまり専門書を必要とすることがありませんが、学年が上がるにつれて専門書を見る機会が増えていきます。その際に本の取り扱いについて今一度気を付けてください。図書館の多くの専門書には折り目が付いていたり、アンダーラインやメモが書いてあります。濡れた跡やページが破られている本も多くあります。また毎年多くの本が行方不明になっています。図書館でも図書の修理や再購入を行ってはいますが、あまりに量が多いため全く追いついていないのが現状です。図書館にある本は、これから先も多く多くの学生に必要とされていきます。折り目やアンダーラインを付けたいならば写真を撮ってください。自分のものにしたいなら自分で買ってください。奈良高専の学生なんですから「学校のものみんなのもの、大切に使いましょう」などと小学校で教わる常識ぐらい言われなくとも守って本を大切に扱ってください。

なんだか自分の意見というよりも、世間一般の常識を書いただけで原稿が埋まってしまいました。あちらこちらに上から目線の内容が書いてある気がするよな……えい、ままよ！送信！